第十六回ふくふく童話大賞「大賞」

さようならラム

ラムが死んだ。十六歳だからネコとしては長生きよ、とお母さんが泣きながら言った。ラムはぼくよりずっと年上で、ぼくが生まれてからうちにはいつもラムがいた。

ペット葬儀屋さんの車でラムが行ってしまうのを、お父さんとお母さんとぼくの三人で見送った。ぼくは苦しくなるぐらい泣いた。お母さんも泣いていた。お父さんもちょっと泣いていた。夜も泣きながら眠った。夢でもいいからラムに会いたいと思った。

次の次の日、学校へ行くと、ラムのことはあんまり思い出さなかっ

た。でもうちへ帰ってきて一人で部屋にいると、隣のリビングから、ラムが足音をたてて歩いてくるような気がした。ラムは白くて大きなネコで、ネコのくせにいつもドスドスと音をたてて歩いていた。「ラム」と呼んでみるけど、足音は聞こえてこない。涙が出てきた。

何日かして、お母さんがラムのトイレを片付けた。ぼくたちのトイレの便器の横にラムのトイレは置いてあった。だからトイレのドアはいつも少し開けておいた。ラムは前足でじょうずにドアを開けて入った。そして用を足したあとはなぜだか走って飛び出してきた。もうドアはぴったり閉めていい。ぼくが生まれてから、いつでも少し開けてあったドアだけど。

トイレを片付けたあとも、ラムのベッドもエサ入れも水入れもまだそのままにしてあった。

「見るたびに思い出すけど、片付けちゃったら、それが置いてないことがまた悲しいから」

お母さんはお父さんにそう言っていた。お母さんも、寝る前とか朝起きたとき、泣いていることがある。お母さんのほうが、ぼくよりずっと長くラムといたから、よけいに寂しいのかな。

ぼくだって、たくさん思い出がある。

ゆかの上に寝そべってテレビを見ていると、いつもラムがそばに寄ってきて、ぼくの足をまくらにして横になった。

プロレスごっこもした。やりすぎると怒って、ぼくの手にかみついた。お母さんは、

「ラムがいやがることとするからよ」

と言って、いつもぼくのほうがしかられた。

小さい怪獣のおもちゃを並べて遊んでいるとき、ラムは前足でわざとおもちゃを倒した。それをコロコロ転がして、両足で持ち上げて口にくわえたりして遊ぶ。しまいにはテレビや戸棚の下におもちゃが入っちゃって取れなくなる。ラムは知らん顔する。ぼくは長いものさしや、おもちゃの剣なんかを突っ込んで、ホコリといっしょにそれを取り出す。だからビー玉とか、小さいものを床に置きっぱなしにしてる

とお母さんに注意された。

「ラムが転がすから片付けて」って。

ぼくの消しゴムコレクションも、よくラムが転がしてって行方不明になった。

ぼくは、おもちゃ箱の上に置いてある、消しゴムのコレクションを開けてみた。もとはチョコレートが入っていたきれいなカンに入れてある。ひとつひとつ取り出して眺めていたら、緑色のサッカーボール型の消しゴムに小さな傷があった。ラムが爪でひっかけた傷だ。ラムがそれを両方の前足で転がして遊んでいる姿が目に浮かぶ。そうするとまた、もうラムはいないんだって思い出して涙が出そうになる。

カメの怪獣のかたちをした消しゴムが見あたらないのに気がついた。青くて大きくてずっしり重い、二年生のときにお父さんに買ってもらったやつだ。カンの中身を全部出して見たけど、ない。机の引き出しにもない。いつからないのか考えたけど思い出せない。

ひょっとしてラムが転がしていったのかも知れない。ベッドの下をのぞいてみたけど何もなく（きのうお母さんが掃除機をかけていたから）、机を動かして裏がわを見たら、えんぴつと別の消しゴムが出てきた。これはぼくが使っていて落っことしたものだ。

リビングのテレビの下を、腹ばいになって奥のほうまでのぞいたけど、ホコリがたまっているだけだった。冷蔵庫の下には、野菜のかた

ちのマグネットが落ちていただけだった。どこにいっちゃったのかな。
ラムが死んだのは土曜日だった。それから二回目の日曜日、お母さんが残っていたキャットフードを袋に詰めて、ネコを飼っている知り合いに持っていった。そしてエサ入れと水入れをきれいに洗って、洗面所の下にしまった。そのあいだ、お母さんは何もしゃべらなかった。
ぼくもだまって見ていた。
毎朝、目覚ましがなるとすぐにラムはお母さんのベッドのそばへいって、
「ウワン、ウワン」
と鳴いた。お母さんはそれを

『ごはん、ごはん』って言ってるよね」
と言っていた。人の言葉がしゃべれるネコって、気のせいだと思うけど。
お母さんがベッドから出てエサを入れるまで、ずっとお母さんの足元にまとわりついて「ウワン、ウワン」と鳴いた。お母さんは足をとられて転びそうになることもあった。ラムはとしをとってから、ごはんのたびに新しい水を入れてとねだった。お母さんは
「くみたての水はあんまり好きじゃなかったのに、変わったのね」
と不思議がっていた。
こうして、だんだんとラムのものがかたづけられていく。

「ゆかのそうじが楽になったな、ラムの毛が落ちないから」
次の日曜日に、お母さんがそう言った。まえは、毛布や洋服に、よくラムの毛がついていて、粘着テープでとったりしたけど、もうそんなこともない。そういえばラムが死んだ次の日、お母さんはラムの首輪とおもちゃと、それからラムのベッドについていた毛をひとつまみ、ビニールの袋に入れてどこかへしまっていた。
ラムが死んでから、お母さんがぼくにラムの名前を言ったのは初めてだった。忘れているんじゃなくて、わざと言わないようにしてるんだってぼくは思っていた。
「お母さん、ラムの夢見た？」

と聞いてみた。お母さんは驚いた顔をして
「ううん。あんたは見たの？」
と言った。ぼくが首をふって
「お母さん、ぼく夢の中ででもラムに会いたいよ」
と言うと、
「そうね。」
お母さんは泣き出して、ぼくの肩をやさしく抱いた。
「ラムのこと、忘れられないよね」
ぼくはお母さんの腰に腕をまわして言った。
「ラムが死んでいなくなっちゃっても、ラムのこと大好きな気持ちは

なくならないからね」

お母さんは言った。そして

「今はまだすごくつらいけど、心の傷ってだんだんと治っていくものだからね」

そう言いながらぼくの頭をなでてくれた。

「もうベッドも片付けようか」

お母さんは、気持ちを切り替えるようにそう言って、涙をふきながら、大きなビニール袋を台所から持ってきた。そしてリビングのすみにあるラムのベッドのクッションをビニール袋に押し込んだ。

「天国で、もっと上等のベッドで寝てね」

そう言いながらベッドを袋に入れようとした時、コロっと何かが転げ落ちた。ぼくの怪獣消しゴムだった。

「あっ、ぼくの消しゴム。ベッドの中までもっていってたのかぁ」

消しゴムは、ひっかいたりかんだりしたあとがあった。ぼくはそれを手のひらにのせてまた涙がこぼれそうになった。

「ラムは、あんたのこと大好きだったね」

とお母さんが言った。

「でも、お母さんのことが一番好きだったと思うよ」

ぼくは言った。お母さんは

「そりゃそうよ」

と言いながら、ビニール袋のくちを結んで、ポンとそれを手でたたいた。

（諸見志津子）

雨蛙　鈴蛙

おいらは蛙。雨蛙。

公園の小さな池がおいらと仲間たちの家なんだ。

今日も元気に仲間たちの大合唱がはじまった。

「ゲロゲロ」

「グワッグワッ」

ピョーン、ピョン。

仲間たちの声に合わせて、おいらは高くジャンプする。

「ゲロゲロ」

「グワッグワッ」
ピョーン、ピョン。
どうして鳴(な)かずにジャンプするかって？
鳴けないからにきまってるだろう。
おたまじゃくしから蛙(かえる)になって、仲間(なかま)たちはみんな「ゲロゲロ」「グワッグワッ」と声(こえ)をだして鳴きはじめた。
だけどおいらだけは違(ちが)ったんだ。
「ゲロゲロ」
「グワッグワッ」
ピョーン、ピョン。

だからおいらは、仲間たちの声に合わせて誰よりも高くジャンプする。

鳴けないからって仲間はずれにする奴はこの池にはいない。

みんな気のいい連中なんだ。

仲間たちの声を聞きながら、おいらは踊るみたいにジャンプして、

ぽちゃんと池に飛び込んだ。

今日の天気は曇り空。

運がよけりゃ雨が降る。

もっと運がよけりゃ、赤い傘を差したあの子に会える。

素敵な音色がやってくる。

やっぱり降った。雨降った。

池のふちにあがったおいらは、まだかまだかと通り過ぎる人間の子どもたちが差す、色とりどりの傘を見送った。

チリンチリン。

ほら、近づいてくる素敵な音色。

赤い傘の取っ手に、ヒモで銀の鈴をくくりつけた女の子がやってきた。

名前はエミちゃん。近くの小学校に通っている女の子で、雨の日の学校帰りはいつもこの公園を通り抜けていくんだ。

雨の音にまじって、エミちゃんが歩くとチリンチリンと鈴が鳴る。

その鈴の音がおいらの一番のお気に入り。
雨が降って、仲間たちも上機嫌で大合唱。
前のおいらは、こんなとき、本当は少しだけ寂しかったんだ。
みんなの合唱に合わせて、どんなに高くジャンプしても、鳴けない
おいらはみんなと違う。
当たり前のそのことが悲しかった。
だけど、初めてエミちゃんの鈴の音を聞いたとき、不思議と楽しい
気持ちになれた。
鳴いても鳴かなくても、蛙は蛙。
おいらは雨蛙。

雨の日はみんなでご機嫌なのさ。
仲間たちの大合唱と、エミちゃんの鈴の音を聞きながら、おいらは池の周りを飛びはねる。
ピョン、ピョン、ピョーン。

晴れ、晴れ、くもり。今日は雨。
いつものように、おいらは池のふちにあがってエミちゃんを待っていた。
おいらとしたことが、いつのまにか周りで鳴いていた仲間たちの声がピタリとやんでいたことに気づかなかった。

雨の音を聞きながらエミちゃんを待っていたおいらは、突然、後ろから伸びた手にぎゅっと体を押さえつけられた。

「やった！　つかまえたぞ！」

「ほんとだ。おれにもさわらせろよ」

なんてこったい。

黄色いカッパを着た男の子たちに、おいらはまぬけにもつかまっちまったんだ。

「おかしいな。この蛙、全然鳴かないぞ」

鳴けないおいらに鳴けだなんて、頭をつつかれても、お腹をつつかれても、そいつは無理な相談だ。

じたばた手足を動かすのがおいらの精一杯なのに、男の子たちはどうしてもおいらの鳴き声が聞きたいらしくて、おいらをつかんでいる手に少しだけ力を入れた。

つ～ぶ～さ～れ～る～！

もうだめだと思ったそのとき、おいらの耳にエミちゃんの鈴の音が聞こえた。

「やめなさいよ」

目の前に、赤い傘を差したエミちゃんが立っていた。

「かわいそうじゃない。はなしてあげてよ」

そうだ、そうだ。

おいらはエミちゃんの優しい言葉がうれしかった。
「おれがつかまえたんだから、おれの勝手だろう」
そう言って男の子はエミちゃんの肩を押した。
おいらはどうにか残った力を振り絞り、ジャンプして男の子の手から抜け出すと、その顔に蛙キックをおみまいしてやった。
「うわっ」
「逃がすな！」
もう一度おいらをつかまえようと伸びてくる四つの手をくぐりぬけ、ぽちゃんと池の中に逃げ込んだ。
さすがに男の子たちも池の中までは追いかけてこない。

「おまえのせいだぞ」
池の中から様子を見ていると、おいらが逃げ出したことに腹を立てた男の子たちは、またエミちゃんの肩を押して突き飛ばした。
チリーン。
傘に結んでいたヒモが切れて、エミちゃんの鈴が地面に転がる。
エミちゃんが拾おうとした鈴を男の子のひとりが素早く手に取った。
「なんだよ、こんな鈴」
取り返そうと手を伸ばすエミちゃんに見せつけるように、男の子は大きく腕を振ってその鈴を投げ捨てた。
円を描いた鈴は、雨の粒と一緒に水面を揺らして池の底に沈んでい

く。

おいらはそれを黙ってみているしかなかった。

男の子たちが帰っても、エミちゃんは鈴が沈んだ場所を悲しそうにじっと見詰めていた。

おいらが楽しみにしていたぐらいだ。

きっとエミちゃんにとってもあの鈴は大切なものだったに違いない。

しばらくして、とぼとぼと帰っていくエミちゃんの背中を見送ったおいらは心に決めた。

おいらは蛙。雨蛙。

そうさ、この池はおいらの家。

エミちゃんの鈴だってすぐに見つかるさ。

晴れ、晴れ、晴れ。やっと雨。

仲間たちにも手伝ってもらって、エミちゃんの鈴を見つけたおいらは雨が降る日を心待ちにしていた。

「ゲロゲロ」

「グワッグワッ」

仲間たちの声に合わせてジャンプするのは後回し。

おいらは拾った鈴と一緒に池のふちでエミちゃんを待った。

鈴を返したらきっとエミちゃんは喜んでくれるだろう。

そう考えるだけでおいらの心はウキウキしていた。
色とりどりの傘を差した子どもたちの中に、おいらはエミちゃんの赤い傘を見つけた。
だけどおいらはエミちゃんに鈴を返すことができなかった。
チリンチリン。
エミちゃんの傘に新しい鈴がついていたからだ。
おいらは隣にある鈴を振り返った。
池の底から拾った鈴は、新しい鈴と比べるとずいぶん汚れている。
これじゃあエミちゃんを喜ばせることなんてできやしない。
おいらが落ち込んでいると、今まで気ままにあちこちで鳴いていた

仲間たちが、おいらの周りに集まっていっせいに鳴きだした。

「ゲロゲロ」

「グワッグワッ」

「ゲロゲロ」

「グワッグワッ」

急にはじまった大合唱に、エミちゃんが不思議そうに近寄ってきた。

せっかく仲間たちにも手伝ってもらって見つけた鈴だ。

迷ったけど、おいらはその鈴をくわえてエミちゃんの足元でピョンピョンとはねた。

びっくりした顔でおいらを見たエミちゃんは、おいらが持ってる鈴に気づいてそっと手をさし出した。

おいらがエミちゃんの手のひらに鈴をのせると、エミちゃんはにっこり笑って汚れた鈴を大事そうに握りしめた。

ああ、おいらはその笑顔が見たかったんだ。

エミちゃんは傘につけてあった新しい鈴をはずすと、鈴がついたヒモを輪にして、おいらの首にかけて言ったんだ。

「ありがとう、蛙さん」

この日からおいらはますます雨の日が好きになった。

「ゲロゲロ」

「グワッグワッ」
チリンチリン。
おいらは蛙（かえる）。雨蛙（あまがえる）。
雨（あめ）の日はご機嫌（きげん）なのさ。

（千葉真由美（ちばまゆみ））

オバーの宝物

「なんでこう、最近はドロボーが多いんだろうね。ああ、ぶっそうだ、ぶっそうだ」

一軒家で一人暮らしをしているオバーは、あるときテレビのニュースを見ながら、大きなためいきをついた。

「ふーっ。うちには大事な宝物がいっぱいあるんだよ。どうしたらいいだろうねぇ。ああ、たいへんだ、たいへんだ」

ひとりごとをブツブツいいながら、オバーはふと、いいことを思いついた。

「そうだ、大事なものはいつも持ち歩けばいいんだわ」

オバーはバッグにおさいふや通帳や印かんやオジーの写真、それからそれから、あれこれ詰め込んで、どこへ行くときも、大事な荷物を持ち歩くようになった。

でもしばらくすると、家においてあるあれもこれも気になりだして、オバーが持ち歩くものはたちまち両手にいっぱい、背中にどっさりになってしまった。

大変なのは買い物に行くときだ。行くときでさえ荷物がいっぱいなのに、買ったものを持って帰るのはしなんのわざだ。

両手にバッグやふろしき包み、背中にはリュック、そしてお腹にも

リュック、それでも荷物が持ちきれないときは頭の上にものせて、まるで荷物そのものが道を歩いているようだった。

けれど、まだ家においてあるものがドロボーに盗まれるかもしれないと思うと、オバーの心配はますますつのるばかりだった。

そのうち、オバーはどこで見つけたのか、リヤカーを手に入れた。

「リヤカーはラクチンだねぇ」

それからどこへ行くときも、オバーは荷物をいっぱい積んだリヤカーを引いて歩いた。

近所の人たちはオバーのことを、いつのまにか「リヤカーオバー」

と呼ぶようになった。

しかし、しばらくするとリヤカーに乗せきれないもののことが気になりだした。オバーの心配は決してなくならなかったのだ。

オバーはオジーのお墓の前で考えた。

「オジーや、どうしたらいいだろうねぇ。ここにはこうして来たいし、家から一歩も出ないわけにはいかないよ……」

リヤカーにいっぱいの荷物を見つめながら、オバーは考えた。

そうして、今度こそいいことを思いついた。

「家ごと持ち歩けばいいんだわ。」

オバーは家にタイヤをつけることにしたのだ。

次の日からさっそく大工事が始まった。オバーの子どもたちや近所の人も手伝って、家全体を持ち上げ、トラックにつけるような大きなタイヤを十本つけた。

「さあ、これで安心」

オバーはどこへ行くときもタイヤのついた家をひっぱって歩いた。買い物に行くときも。散歩に行くときも。オジーのお墓参りに行くときも。

それからオバーは「家ひきオバー」と呼ばれるようになった。

オバーが一番困ったのは、孫の家へ遊びにいくときだった。孫はマ

ンションの三階に住んでいるので、三階まで家を持っていくことができないのだ。

オバーが家をひっぱって歩くようになってから、オバーの孫も近所で有名になった。なにしろ、オバーの声があまりにも大きかったのだ。

「カナちゃ～ん、オバーがきたよ～。

カナちゃ～ん、顔を出しておくれ～」

孫のカナちゃんはオバーの大きな声がするたびに、部屋から出てこなければならなかった。

あるとき、孫のカナちゃんはオバーにきいた。

「オバーはどうしていつも家をひっぱって歩いているの？」
「そりゃあ、この家には大事な宝物がいっぱいあるからだよ」
「ふーん」
カナちゃんは不思議だった。だってオバーの家は、柱はキズだらけだし、障子やふすまもやぶれてボロボロだし、お茶わんやお皿だって、欠けたり、ひびが入ったりしているものばかりだったからだ。
（オバーの宝物って、いったいなんなんだろう？）
カナちゃんにはオバーの宝物がなんなのか、さっぱりわからなかった。カナちゃんは思い切って聞いてみることにした。
「ねえ、オバー。オバーの宝物ってなあに？」

「あいや、それはね、簡単に話せやしないよ。どこでドロボーがこの話しをきいているかも分からないからね」
オバーはあちこちを見わたしながら、小さな声で言うのだった。
カナちゃんはますます、あの家にはすごい宝物があるにちがいないと思った。

あるとき、オバーが家をひっぱって歩いていると、近所のネコたちがオバーをみてコソコソとないしょ話をしていた。
オバーがネコたちに
「なんの話しだい？」

と、問い詰めるとネコたちは言った。
「オバーは家だけをひっぱって歩いているから庭はいらないんだよね。それなら、ボクたちに庭をちょうだい！」
「チョーダーイ！」
「チョーダイ！」
「チョーダーイ！」
「チョーダイ！」
オバーは、「しまった！」とつぶやいて、家をひっぱって急いで庭に戻った。今度はどうやって、庭を盗まれないようにするか考えた。庭にも大事な宝物がいっぱいつまっているのだ。

オジーと耕した小さな畑や花だん。子どもたちが転んで泣いた庭の石ころ。スイカを食べながら、家族みんなでタネ飛ばし競争をした縁台。

考えても、考えても、眠れない日がつづき、庭から一歩も出られなくなってしまった。

ある朝、オバーはまたいいことを思いついた。

オバーはそれから何日も何日もかかって、スコップで庭を掘り起こし、家の上に庭を全部乗せてしまったのだ。

家ひきオバーはそれから「家ひき庭ひきオバー」と呼ばれるように

なった。

オバーはどこにいくときも大事な家と大事な庭をひっぱって、いつも一緒だ。

「オジーやオジー、もうこれで安心ですよ。オジーとわたしの大事な宝物は決して誰にも盗まれたりしませんからね」

オバーはオジーのお墓の前で手を合わせた。

オバーの宝物、それは柱のキズにも、やぶれた障子やふすまにも、欠けたりひびが入ったお茶わんやお皿にも、家中に、そして庭中に、ギューッと、ギューッと、つまっているのだ。

家ひき庭ひきオバーのイビキが今夜も近所にひびきわたっている。
そんなに大きなイビキはどこから聞こえるかって？
オバーはドロボーに家と庭を盗まれないように、家のカギを全部しめて、家の上の庭でぐっすり眠っているんだって。
うむやす、うむやす。

おしまい

（ざきみじゅんこ）

※「うむやす」とは、宮古島の方言で「安心できる」という意味です。